

神を語ることについて  
—アッターール『神の書』における佳人を用いた表現方法—

石川 喜堂  
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程

**要旨**

本稿では、12世紀から13世紀に活躍したペルシア神秘主義詩人アッターールの韻文作品の一つである『神の書』に登場する佳人をめぐる寓話に着目することによって、その神秘主義思想がどのように表現されているかを分析する。アッターールはその韻文作品では多くの寓話を用いて、その思想や教えを伝えようとしている。ペルシア神秘主義の伝統では、佳人は神の象徴であり、詩の主要テーマは「神への愛」である。彼の時代において既にスーフィズムはアラビア語の恋愛詩を介して「神への愛」の理論を発展させていたが、アッターールはペルシア語の詩作において寓話を多用することで、「神への愛」を実践する者の具体的な心理の機微の描写とメタファーとしての佳人に関する詳しい記述という2つの表現形式の中に、語りえない神について敢えて語ることを可能にする回路を見出したのではないか。

本稿はアッターールの佳人の寓話を分析することで、アッターールによる「神への愛」の特徴を明らかにし、その思想史的な位置づけを再考する。

**キーワード**

「神への愛」、佳人、『神の書』、『吉兆』、『愛するものたちのジャスミン』

## **About Telling of God: The Mode of Expression Using the Beauty in ‘Aṭṭār’s *Ilāhī-nāma***

Kido Ishikawa  
Doctoral Student  
Graduate School of Asian African Area Studies, Kyoto University

### **Abstract:**

In this paper, I analyze how ‘Aṭṭār expresses his mystical thought by observing the parable related to beauty in ‘Aṭṭār’s *Ilāhī nāma*. ‘Aṭṭār tried to convey his thought and teaching in his verses by taking advantage of many parables. Under the tradition of the persian mysticism, the beauty is recognized as a symbol of God, and the main theme of ‘Aṭṭār’s verses is “love toward God.” Though, in the era in which ‘Aṭṭār lived, theory of “love toward God” was already developed, he made a new way to tell of God by applying the psychological description of the practitioner of “love toward God” and the description of the Beauty depicted by metaphors.

In this paper, I indicate the originality of ‘Aṭṭār’s “love toward God.” by analyzing the parable of ‘Aṭṭār.

### **Keywords:**

“love toward God,” the Beauty, *Ilāhī-nāma*, *Sawānih*, *‘Abhar al-‘āshiqīn*

## 序論

ペルシア神秘主義詩人の代表的な人物の一人であるアッタールや彼の作品についての研究は枚挙に遑がないが、本研究がアッタールの作品に関する研究という性格を有しているため、ごく簡潔ではあるが主要な先行研究について数点述べ本研究の位置づけについて示す。アッタール研究においてまず取り上げられるのはヘルムット・リッターの『精神の大海』<sup>1</sup>であり、ドイツ語で700頁以上にもおよぶこの大著に含まれる情報量は他の研究の追隨を許さない。また、アッタールと彼に関係する人物の思想が章ごとに整理されている点もこの書物の評価点としてあげることができる。同じく古典と述べてもいい研究にフォルザーンファルの研究<sup>2</sup>があり、こちらも参照すべき研究書であるが、情報の整理の仕方に着目するのであるならば、アッタール研究において第一にあげる研究は前述のリッターの研究であろう（情報量も多く、多くの文献を参照しているのだが、リッターと比べると整理されていないと述べることができる。また、アッタールの著作について述べる時に、不必要にアッタールの著作からの引用が多く、その箇所は研究書というよりもアッタールの著作の紹介文という印象を禁じ得ない）。割愛するが、他にも多くの研究書があり、大づかみなやり方で分けるならば、内包（思想的な内容）に特に着目する研究と外延（結果物としてテキストに現れる表現など）に着目する研究がある。そして、本研究は後者の方に比重を置いている。

近年でもアッタール研究は洋の東西問わず盛んで、2007年にはアッタールに関する研究書<sup>3</sup>も出版され、2年前には彼に関する国際シンポジウムも行われた。また、日本語でも、両方抄訳ではあるが藤井守男訳の『イスラーム神秘主義聖者列伝』<sup>4</sup>と黒柳恒男訳の『鳥の言葉』<sup>5</sup>がある。

## 1. アッタールについて

アッタール (Farīd al-Dīn ‘Attār, d. 617/1221?) はセルジューク朝 (1038-1194) からホラズム・シャー朝 (1077-1231) の時期に活躍した詩人であり、サナーイー (Abū al-Majd Sanā’ī d. 525/1130-1) とルーミー (Jalāl al-Dīn Rūmī d. 672/1273) と並んで最も高名な神秘主義詩人の一人でもある。しかし、彼の人生は極めて不明瞭なものであり、確実に明らかになっていることは、彼が薬物香料商を営みながら神秘主義詩を詠みあげたことだけである<sup>6</sup>。また、彼の作品は100作品以上にのぼるとされてきたが、そのほとんどが後世に書かれた偽作であり、真作と明確に述べることができるのは、韻文では5作品、散文では1作品のみだけである<sup>7</sup>。その真作である韻文5作品の内4作品がマスナヴィー体という『王書 (Shāh-nāma)』などの叙事詩に用いられた詩形を用いて記述されている。本論文で取り上げる『神の

書 (*Ilāhī-nāma*)』もそのアッターールのマスナヴィー体で書かれた真作である韻文作品のひとつである。

マスナヴィー体で書かれた4つの韻文作品の内3つの作品において杵物語という手法が取られていて、『千夜一夜物語』と同様に、大きな一つの物語の中に、小さな寓話が多数挿入されることによって作品が成り立っている。ある研究者は、アッターールが、彼の思い描いていたスーフイズムの教えを他者に伝達するために詩作を行ったと主張する<sup>8</sup>。すなわち、教義を伝達するという目的のために、詩が作られたと主張したのである。そのことがアッターールにとって詩作を行うことの第一の目標であったのかどうかは明らかにすることはできない。しかしながら、少なくとも、彼が寓話というものを多用したことは前述したように明らかであるし、寓話というものの特徴の一つに教えを伝達するという機能が含まれている<sup>9</sup>ので、すくなくともその意図があったということは断定できないにしても、推測することができる。

それでは、アッターールが寓話によって示している教えとは何なのであろうか。それは、彼が持っていたスーフイズムの思想に他ならない。なぜなら、スーフイズムの思想こそ彼の作品に共通するような思想上の主題だからである。そして、アッターール作品における主要な思想上のテーマが「神への愛」であることは、多くの研究者が指摘することであり<sup>10</sup>、アッターール自身の作品からも一目瞭然である。「神への愛」というものをアッターールは佳人<sup>11</sup>という比喻を使うことによって『神の書』を含む様々な作品において表現する。特に、『神の書』のある一つの寓話においては、アッターール独特の表現によって「神への愛」が示されている。本論文においても、その寓話を取り上げることにする。しかし、「神への愛」自体はアッターール以前から多くの者によって言われてきた考えであるので、アッターールの特徴を表すためには他のものとの差異を明らかにしなければならない。そこで、本論文では、アッターール以外の2つの代表的な「神への愛」を論じた作品を取り上げることにする。それらの作品と比較することによってアッターールの「神への愛」における特徴が明らかになるであろう。

## 2. 「神への愛」について

「神への愛」というのは「心的境地 (*aḥwāl*)」と「階梯 (*maqāmāt*)」と関わるものであり、神を愛することによって自己をいかに超越するかということが主眼にあり、最高の状態や階梯に至ることがその概念の目標に据えられている<sup>12</sup>。しかし、その状態や階梯がどのようなものであるかということについて「神への愛」を論ずるもの間には共通点もあるが相違点もある。そして、多くのスーフイズ

ム思想に関して語るものが「神への愛」についても語っている。それゆえに、「神への愛」について書いた書物を全て取り上げることはできない。そこで、本論文では、「神への愛」について論じている代表的な思想家の作品の内、アッタールと同様にセルジューク朝期に活躍した著名なスーフィズムの思想を述べた思想家の二つの作品を比較のために取り上げることにする。

取り上げるまず一つ目の作品はアフマド・ガザーリー (Aḥmad Ghazālī d. 520/1126) のものである。アフマド・ガザーリーは、スーフィズムの思想の愛について説いた有名な思想家であり、兄に著名な神学者アブー・ガザーリー (Abū Ghazālī d. 504/1111) を持つ。また、アッタールの最も有名な韻文作品である『鳥の言葉 (Manṭiq al-Ṭayr)』はアフマド・ガザーリーの『鳥の論考』と関係を持つと言われている<sup>13</sup>。本論文では、アフマド・ガザーリーの著作において愛を説いた作品の代表作である『吉兆 (Sawānih)』を取り上げることにする。

アフマド・ガザーリーがアッタールより前の時代を生きていた人であるのに対して、もう一つの取り上げる作品の著者であるルーズビハーン・バクリー (Rūzbihān Baqlī d. 606/1209) はアッタールの同時代の人物であり、彼もまたスーフィズムの思想の愛について説いた著名な人物である。本論文では彼の著作において愛を説いた作品の代表作である『愛するものたちのジャスミン (‘Abhar al-‘āshiqīn)』を取り上げる。

### 3. ガザーリー『吉兆』の概要

ガザーリーの『吉兆』は難解な書物とされている。その理由は、この書物が体系だって書かれていないことに起因する<sup>14</sup>。この書物は章と、章の主題に基づいた詩から成っていて階梯や状態を順番に説いていくというものではないのである。取り上げる書物自体が体系だってないがゆえに、本論文でもこの書に書かれている「神への愛」に関係する内容を体系づけずに順番に羅列することにする。また、主張が重複している箇所は冗長になるため下記の羅列から省略することにする。

(1) この書物はハディースには「愛 (‘eshq)」と関係するようなものがあり、それを知るためには「内奥の知 (bāten)」に精通する必要があると述べる<sup>15</sup>。

(2) 神との合一について説き、それに到達できないとき彼についての詩を作ることになる<sup>16</sup>。

(3) 私というものの存在は愛によって不在から存在になり、愛が本質であることが説かれる<sup>17</sup>。

(4) 清浄になったとき、愛が明らかになり、愛から私があることが説かれる。すなわち、愛とは他ではなく自分であることが言われる<sup>18</sup>。

(5) 愛するものと詩の言葉の違いについて述べられる<sup>19</sup>。

(6) 愛と「魂 (rūh)」の関係について説かれ、愛が鉱山における宝石、天における太陽というようにさまざまな比喻によって表現されている<sup>20</sup>。

(7) わずかな存在にも愛が輝くようなものとして表され、愛の状態が溺れることによって表されている<sup>21</sup> (太陽と溺れるという比喻はアッタールも多用する)

(8) 「非難 (malāmat)」の効能について説かれる。非難から三つのことが生じ、それは、被造物と、愛する者と、愛されるものに起こると述べられる。すなわち、結果として被造物は他というものを見なくなり、愛するものは自己を見なくなり、愛されるものは愛から力を得ることが述べられている。そして、愛するものと愛されるものが一緒になって、二つが分けられないようになることが説かれる<sup>22</sup>。

(9) (8) 番でも登場するように、自己と愛するものと愛されるものを分けないようにすることが重要であり、そのためには傷が必要であることが説かれている。また、愛が自己を壊すということが説明される<sup>23</sup>。

(10) 愛するものと愛されるものが愛から派生することが述べられている。また、詩においては神が月にたとえられていて、輝きを放ちながら隠れてしまうことが述べられている<sup>24</sup>。

(11) 鳥などを用いながら自己などに対する比喻を使った描写が続く<sup>25</sup>。

(12) 愛するものは愛の鏡によって美しさを得て、愛されるものの美から、愛されるものに愛するものが近づくことが述べられる<sup>26</sup>。

(13) 合一について考えることと合一の真実は似て非なることが述べられる<sup>27</sup>。

(14) 愛は災難であることが説かれていて、愛は最初において非難と悲しみと結びつくことが述べられている<sup>28</sup> (肯定的な意味で)。

(15) 「ファナー (fanā')」<sup>29</sup> について述べられていて、そこにおいては「戒律 (ahkām)」が消滅することが述べられる<sup>30</sup>。

(16) 愛されるものと愛する者の愛の違いについて述べられている。愛するものに対する愛は真実であるが、愛されるものに対する愛は鏡を通したものであることが説明される<sup>31</sup>。

(17) 友と敵の関係が逆転することが述べられる<sup>32</sup>。

(18) 合一には熱情が必要であることが述べられる<sup>33</sup>。

(19) 愛するものが選ぶのではなく、愛されるものによって選ばれることが述べられる<sup>34</sup>。

(20) 「離別 (ferāq)」と「結合 (veṣāl)」というものが表裏一体であることが説明される。その理由として、自己との分離は真実との結合であり、真実からの分離は自己との結合であることが述べられる<sup>35</sup>。

(21) 愛するものが愛されるものから招待されることが述べられている<sup>36</sup>。

(22) 合一後の境地について説明される<sup>37</sup>。

(23) 愛の性質、名誉と暴君と自己と偉大に言及され、ファナーにおいては反対のものが統一されることが述べられる<sup>38</sup>。

(24) 愛されるものが隠されていることが述べられていて、それは愛されるものに対する用意や資格があっても同様であることが述べられている<sup>39</sup>。

(25) 愛するものに喜びは最初になく、それは後からやってくるものであることが述べられている<sup>40</sup>。

(26) 愛の秘密はエシュク（愛）という言葉の中に隠されていることが説かれる（エシュクは3つの文字からなっているという説明があり、そこには多くの秘密があり肯定的に扱われているが、それがどのような秘密であるのかは触れられない）<sup>41</sup>。

(27) 愛する者と愛されるものは敵であることが説明されていて、その理由として、愛においてそれらの習慣の削除が必要であることが説明される（それがそれ自身である時、敵であり続けることを理由として挙げている）<sup>42</sup>。

(28) 次に愛されるものは名においては愛から派生したものであるが、「愛されるもの自体（ma'shūq）」は愛から派生したものではないことが述べられる<sup>43</sup>。

(29) 愛への大望というものには白と黒という二つの味わいというものがあり、一つは寛大さであり、一つは中傷であることが述べられる<sup>44</sup>。

(30) 愛されるものの圧制には2種類あることが言われ、一つは愛の上昇においてであり、一つが愛の下降においてであることが説明される。前者は愛するものが多用なものの中にあることで、（愛する者以外と結びつくという）愛における困難に陥ることによって生じて、後者は多くのものに至る愛において（愛されるものに対する）愛が不足することによって生じるものであることが述べられている<sup>45</sup>。

(31) 考えることによって愛する者は災厄に陥ることが述べられる<sup>46</sup>。

以上がガザリーの『吉兆』において「愛」について主に記述されていることである。後述するが、アッタールの『神の書』における「神への愛」についても共通する考え方が現れていることが多い。さらに、それだけではなく、ガザリーが「愛」を比喻によって表現するのと同様に、アッタールの作品に登場する「神への愛」の対象である神も、類似する比喻によってしばしば表現されている。例えば、愛が鉱山における宝石であり、太陽であるという比喻はアッタールも好んで神に使う比喻である<sup>47</sup>。ガザリーの場合は「愛」そのものを表していて、アッタールでは「愛されるもの」である神という点において相違点があるように見えるが、アッタールに登場する神はガザリーにおける愛とほとんど変わらない役

割を果たしているので、両者を比較検討して、類似すると主張することは突飛なことではない。また、「神への愛」を実践する、愛するものの心理描写やありかたも類似した表現によって表される。それが、如実に現れているのが、小姓アヤーズとマフムード、およびライラとマジヌーンを愛するものの比喻として寓話や詩に登場させている所である。この書において、ガザリーはこの二つのモチーフを多用しているが<sup>48</sup>、アッタールもまた彼の韻文作品の多くにおいて使うモチーフなのである<sup>49</sup>。以上のことから、「神への愛」についての思想内容においても、その表現においても『吉兆』と『神の書』は共通点が多いことを挙げることができるであろう。

#### 4. バクリー『愛するものたちのジャスミン』の概要

ガザリーの『吉兆』とは反対に、バクリーの『愛するものたちのジャスミン』は体系だっていて、ペルシアの神秘主義思想において最もはっきりと「神への愛」における階梯について述べた書だと言われている<sup>50</sup>。また、この本はダイラミー (Abū Daylamī fl. 10<sup>th</sup> century) の階梯を取り込んでいることが指摘されている<sup>51</sup> (ただし、ダイラミーからバクリーという思想的な流れは疑問視もされている<sup>52</sup>)。そして、この本の最後の4分の1にあたる20から32章において「神への愛」について述べられている。その「愛」はそれ以前に登場する「愛」とは区別されて論じられている<sup>53</sup>。一方、アッタールの『神の書』においては「愛」というものが分けられて論じられていない。バクリーから見たならば、アッタールの『神の書』は両者の愛が混合して論じられるように見えるであろう。しかし、本論はあくまで、アッタールの『神の書』における「神への愛」に主眼を置いた論文であるので、「愛」を分類することは行わない。しかしながら、バクリーの『愛するものたちのジャスミン』を論じるときは、バクリーの意見を尊重して二つの「愛」がある箇所を別々に記述することを行う。そして、バクリーとアッタールの「神への愛」について比較する時には、別々の記述の両方をバクリーの記述として、その時には分類を行わないで比較を行う。

『愛するものたちのジャスミン』の第1章では、まず隷属することによってどのような効能が得られるかということが比喻をまじえて描写されている<sup>54</sup>。例えば天の鳥たちをともなって最高天に飛び立っていくなど、アッタールの最も有名な韻文作品である『鳥の言葉』を彷彿させるような比喻が使われたりする。そして、その服従は愛に関わっていることが、愛のワインなどの表現から如実に表されている。そして、ガザリーも述べているような愛と苦しみが結びついていることも記されている<sup>55</sup>。また、現世において(神を知るような)印はなく、神を知る



神知は死とつながっていることや<sup>56</sup>、「情欲 (shahvānī)」と関わらない愛の重要性などが説かれている<sup>57</sup>。

次の章からは、肉欲や情欲に関する愛の誤りについて詳しく触れられていて<sup>58</sup>、さらに賛美されるような愛の効用について触れられ、そのような愛が遍在していることも述べられる<sup>59</sup>。そして、神の美の世界における顕現について触れられる<sup>60</sup>。その時、スィーモルグがアッタール同様に神の比喩として使われ、ガザリーの『吉兆』を論ずる際に前述したような、ライラとマジヌーンの比喩が使われるようになる<sup>61</sup>。

情欲と美しさという概念は『愛するものたちのジャスミン』においては重要な概念であり、前者は愛によって撃退されるような否定的なものとしてこの書においてはたびたび登場して、愛と対立する構造になっている<sup>62</sup>。後者は肯定的な概念であり、人が持つ美から愛がやってくる。そして、美を持つものを愛することによって、愛するものも美しくなる。結果として、美というものは（心的状態を変えるような）「神への愛」につながる<sup>63</sup>。美は『愛するものたちのジャスミン』においては人と神をつなぐような媒介の役割を果たすのである。

また、前述した苦痛や悲しみというものは、愛にとって重要なものであることが繰り返し述べられている<sup>64</sup>。そして、準備の完璧さや清さや服従から予期せずに愛がやってくるのが説かれている<sup>65</sup>。また同時に、人間は混合物であり欠点を多くもつものであるということが言われる<sup>66</sup>。しかしながら、愛はそのような人間をより高い階梯に誘うことが示されている<sup>67</sup>。そして、人間への愛が「神への愛」に変わることが述べられている<sup>68</sup>。人間への愛の中に「神への愛」が含まれている<sup>69</sup>という記述からも、人間への愛が「神への愛」の架け橋になっていることが示唆されていると述べることができる。さらに、愛を言葉によって語ることを否定することや、魂が鏡を通して愛されるものを見ることによって（それ自体ではなく反射したものを通して愛されるものを見ることによって）愛がやってくる<sup>70</sup>など、ガザリーの『吉兆』と類似した考えが示されている。以上が 20 章より前において述べられている主な「愛」の説明である。

20 章では、服従の重要性が説かれ<sup>71</sup>、次の章では、階梯の最初において悔い改めることがあることを説く<sup>72</sup>。そして、その次の章からは愛に対する恐れについて説明され<sup>73</sup>、愛の本質が剥奪することであることが述べられる<sup>74</sup>。一方、恐れから恵みがあることも述べられている<sup>75</sup>。そして、愛するものから何かを願うのではなく、愛するものだけを求めなければならないことも書かれている<sup>76</sup>。また、愛によって神のもとに帰還するような喜びも描写されている<sup>77</sup>。そして、恐れ以外にも希望が登場し、神が顕現するまでは恐れが希望よりもよりよいものとしながらも<sup>78</sup>、希望によって魂の鳥が羽ばたく（神に近づく）と説明される<sup>79</sup>。

その後、神の目撃することにおいて2つの種類、すなわち、「酔い (sokr)」と「醒め (sahw)」があることが説明される<sup>80</sup>。そして、愛が一般の愛と特別な愛の二つの段階に分けられて<sup>81</sup>、最終的に、愛の顕現から属性を得て、愛するものが愛されるものと一つになることが説明される<sup>82</sup>。

以上がバクリーの『愛するものたちのジャスミン』において愛について述べられていた主なことである。前述したように、ガザーリーと類似した考えが示されている所も多く、愛には苦痛や悲しみが必要などアッタールと類似している所も多い。また、前述したマフムードなどは登場しないが、サヨナキドリやスィーモルグ<sup>83</sup>などアッタールと共通したモチーフを用いていることも多々ある。それゆえに、『愛するものたちのジャスミン』とアッタールの『神の書』の思想内容と表現方法の類似点もガザーリーの『吉兆』と同様に多いことが指摘できる。

## 5. 「神への愛」における『神の書』と『吉兆』と『愛するものたちのジャスミン』の比較

アッタールの『神の書』は前述したように枠物語という形式を取っている。その物語の枠というような大きな物語は、王と6人の王子との対話からなっている。王が王子にそれぞれが望むことを聞き、王子が答える。それぞれの答えに対して、王がそれは本当に価値あるものではないと反論するという形で物語が進む。その過程において、さまざまな寓話が挿入される。しかしながら、この挿入される寓話が枠になる王と王子の対話とテーマにおいて一致するわけではない<sup>84</sup>。それは、アッタールの最も著名な作品である『鳥の言葉』と異なる点である<sup>85</sup>。それゆえに、本論文では、寓話を引用する時、混乱をもたらす可能性が高いと判断するがゆえに、枠となるような物語においてどのような対話が行われていたかについては触れない。

前述したように、『神の書』において重要な主題になっているのは「神への愛」であり、ガザーリーの『吉兆』とバクリーの『愛するものたちのジャスミン』と思想内容や表現を共有するところが多い。それは、寓話の部分だけではなく、アッタールの韻文作品において共有されている枠となる物語の前に挿入される神と預言者への称賛を含めた全体におよぶ。例えば、神を称賛する箇所において以下のような記述がある。

あなたなしであなたからどのように私は生きるのか

cho bī to zen/de gā nī dā/ra maz tost

石川喜堂：神を語ることについて

なぜ私はあなたから肝臓の血を流すのか（悲しむのか）  
che rā khū ne/je gar mī bā/ ra maz tost<sup>86</sup>

この全てのあなたによってある嘆きは何なのか

cho chī zī kīn/ha meh bar shī/va naz tost

あなたなしであなたから私の生がある  
ke bī to zen/de gā nī ye/ma naz tost<sup>87</sup>

別離の痛みを伴って永遠に留まり

be dar de hej/r dar jā vī/d bū dan

絶望より、よりとるにたらないものが多いがある  
be sī ā sān/ta raz nou mī/d bū dan<sup>88</sup>

(中略)

来い、その秘密を伴って両者のことを私たちがいうまで

bi yā tā har/do bā ham rā/z gū yīm

心の古い悲嘆を私たちがはっきり述べる  
gha me dī rī/ne ye del bā/z gū yīm<sup>89</sup>

あなたによって私が想起させられる全ての傷をともなって

be har dar dī/ke az to yā/d mā yad

全ての血管からかぎ爪のような叫びを私に挙げさせる  
cho chan gaz har/ra gī gar yā/d mā yad<sup>90</sup>

これ以上私は何が言えるのか、わが友よ

cho gū yam bī/sha zīn ey ham/da me man

私の悲しみは言葉では言い表せない  
ke na ta vān gof/t dar nā meh/gha me man<sup>91</sup>

これらの箇所は神のことであり、あなたとは神のことを指し、神と離れている別離の悲しみを表した文章になっている。そして、アッタールにおいて神は愛される対象であるので、これらの箇所は「神への愛」に伴う悲嘆をといた箇所であると述べる事が出来る。それは、前述したような、ガザーリーとバクリーの書にある愛には痛みが必要であると述べた箇所と共通する思想である。

もちろん、佳人を神と見立てて「神への愛」を表現する寓話においても両者との共通点がある。例えば、王子に恋をした將軍の逸話という寓話においての愛されるものと愛するものの描写は以下のとおりである。

[愛されるものの描写]

非常に美しい王子がいて

ye kī shah zā /de chūn mah pā/re ey būd

太陽が彼に嫉妬するほどだった  
ke meh raz rash/ke ū ā vā/re ey būd<sup>92</sup>

もし太陽が彼の顔を見るならば

ma lek khor shī/d chūn rū yash/be dī dī

癲癩もちのように新月が来る前に震える  
cho sar 'ī az/ma ye nou mī/ta pī dī<sup>93</sup>

(中略)

彼の唇は蜂蜜であり、砂糖

la bash ham an/ga bī no ham/she kar būd

しかしながら、それぞれの（上下の）唇はそれらよりよい  
ke har yek zīn/do khosh tar zān/de gar būd<sup>94</sup>

[愛するものの描写]

それほどまでに、その圧迫された血の中（悲しみ）にいて

na chan dān gash/t dar khū nān/se tam kash

悲嘆にくれるものもいなかった  
ke har gez gash/te bā shad hī/ch gham kesh<sup>95</sup>

(中略)

私にとってこの牢獄が天国である時

ma rā chūn has/t īn zen dān/be hesh tī

百の果樹園のために日干し煉瓦（すらも）売らない  
be na fō rū sham/be şad bos tān/sh khesh tī<sup>96</sup>

愛されるものの描写においては佳人の美しさを讃えるために自然物が使われている。そして、愛するものの描写においては、佳人と結ばれない将軍の愛の別離における悲嘆が表されている。一方、その次の引用した対句では佳人と偶然同じ場所ですぐすことになることによって（戦においてとらえられて牢獄に入れられることによって）王子と一緒に（合一）になれた喜びが表されている。

このように、アッタールは愛するものの心理状況や状態を描き、愛されるものである神を比喻によって表現する。しかし、前者は3つの書において3者が共通してやっていることであり、後者の描写も、ガザリーの『吉兆』においては行われている描写である。また、愛における悲嘆は、前述したように、ガザリーもバクリーの書でも描かれていることであり、合一の喜びについても両書において言及されていて、特にバクリーにおいて詳しく述べられている<sup>97</sup>。また、モチーフについてもガザリーの『吉兆』やバクリーの『愛するものたちのジャスミン』を論じる時に類似していることはすでに指摘した。

## 6. 『神の書』における「神への愛」の特徴

これまでの考察に基づくならば、アッタールの特徴は確認されないであろう。なぜなら、思想内容においても思想の表現においても先駆者によってアッタールと類似する手法がすでに使われているからである。もちろん、細かい差異や一つの描写にかける分量においては相違点を見出すことはできる。しかし、それは、ガザリーの『吉兆』とバクリーの『愛するものたちのジャスミン』が比喻を多用しながらも、そもそも物語を読みあげているわけではない所に起因していることであり、すなわち、叙事詩の正確を持った物語詩と論述書の違いに起因するものであり、そこから、アッタールの特徴を見出すことはできない（叙事詩に使われていた形式、すなわちマスナヴィー一体で詠みあげたことが新しさとも先駆者があるから述べることはできないし、そもそも、それは「神への愛」に関する新しさではない）。アッタールにおける「神への愛」の特徴を見出すことは不可能なように思われるかもしれない。しかし、前述したように『神の書』における一つの寓話がそれを可能にしているのである。そして、その寓話は、この書において最も多くの分量を割かれている寓話（第5723対句～第6133対句）でこの書の後半部分に位置している。

アッタールの「神への愛」の特徴を表している寓話のあらすじは以下の通りである。

バルフの境域にカップというアミール<sup>98</sup>がいて、彼には美しい息子（ハーリス）と娘（アラブ）がいた。ハーリスにはバクターシュという名の美しい奴隷がいて、

ベクターシュに対してアラブは恋におちた。アラブはベクターシュを思い、悲嘆にくれながら似顔絵を添えた手紙を書いた。その手紙と似顔絵を見たベクターシュもアラブと同様にアラブに対して恋に落ちた。ベクターシュが彼女の姿を見つけ、彼女のスカートをつかんだ。すると、アラブは彼女によって恋されたこと以上のことを求めているベクターシュに対して怒りをあらわにした。そこで、ベクターシュはアラブが死にゆく被造物に対する愛を持っているのではなく、彼女が抱いていた愛がこの世における愛を超えていることに納得した（アラブはベクターシュという儂い被造物を愛していたわけではなく、被造物を超えた愛される対象を愛していたことを知った）。しばらくたつと、アラブにまたベクターシュへの愛が来て、そのことについての詩を詠みあげていた。それを聞いた時、ハーリスは怒りその詩が誰のために読んでいるのかをアラブに問い詰めた。アラブはごまかしたが、彼女に対してハーリスは疑惑を持つようになった。その後、戦が起りハーリスもベクターシュも戦いの中にいた。ベクターシュが殺されそうになった時、顔を覆い誰かわからなくしたアラブが現れ、ベクターシュを救い、軍を勝利に導いた。アラブはその後、再びベクターシュに手紙を書き、治療中のベクターシュもそれを受けとってアラブの気持ちを受けとった。その後、詩人であるルーダキーが、アラブがベクターシュに対して詠んだ詩を聞き、ハーリスの前で披露してしまった。怒りに燃えたハーリスはアラブを殺すことにした。まず、ハーリスはベクターシュを動けなくした後、湯をわかし、アラブの血管を開いて閉じないようにした。その後、アラブを風呂の中に投げ込んだ。アラブは自身の血によってベクターシュへの愛を綴り、詩を風呂の中で書いた。そして、彼女は次の日には死んだ。ベクターシュはその後、動けるようになると、ハーリスの首をとり、アラブの墓前で自らの命を絶った<sup>99</sup>。

この寓話は最も『神の書』で長い寓話であるのだが、そのほとんどは愛する者と愛されるものの描写に費やされている<sup>100</sup>。すなわち、佳人としての娘（アラブ）と佳人としての奴隷（ベクターシュ）の姿形の描写と、愛する者として彼らのそれぞれが発露する気持ちや心理の描写がこの寓話の大半を占めているのである。そして、『神の書』におけるアッタールの寓話においてこの寓話を持つ特殊性は佳人が2人登場し、それらの描写が比喩によって巧みに描写されていることと、佳人が愛するものになったり愛されるものになったり役割が変わることである。愛するものが愛されるものになったり、愛されるものが愛するものになったりする描写はアッタールの作品においては珍しいことではないが、愛の対象であり神の比喩として使われるような佳人が、愛するものと愛されるものが結ばれる所以外で立場を変化させることは稀有なケースなのである（佳人が愛するものになる事例は最も有名なアッタールの寓話であるシェイフ・サンアーンの物語<sup>101</sup>において

も起こるが、そこに登場する佳人はキリスト教徒の娘であり、その設定からもシェイフより立場が優位である神の立場の比喻として使われているわけではない)。ガザリーの『吉兆』やバクリーの『ジャスミンの書』においてもこのような描写が行われていることはなく、神（もしくは愛、および愛されるもの）と愛するものの描写が途中で入れ替わることはなく、この両者は分けられて論じられている。アッタールはこの寓話において佳人にあえて二つの役割を与えている。

この寓話の佳人に神の比喻としての佳人と愛するものとしての佳人という二つの役割を与えることによって、ガザリーの『吉兆』やバクリーの『愛するものたちのジャスミン』の愛されるものや愛が持っていた超越性は著しく損なわれていると述べることができるであろう。なぜなら、他の者から愛されるだけであった自足的なものが、愛することによって他のものを必要とする存在になってしまうからである。しかし、一方で、神の比喻として愛されるものであった佳人が愛するものになることによって、「神への愛」における愛されるものに対して現実的な印象（そこに存在すると思わせるような印象）を与えていることには成功していると述べることができるであろう（それが、超越的なものからの下降運動であろうとも）。すなわち、佳人に二つの役割を与え、愛するものと愛されるものを入れ替えることによって、自然物による比喻によって超越的なものを描写することよりもより現実的な描写を可能にしているのである。

愛するものと愛されるものを入れ替えることはガザリーの『吉兆』やバクリーの『愛するものたちのジャスミン』においては行われていなかったが、恋愛詩においては一般的な文学的手法であるということが指摘されている<sup>102</sup>。それゆえに、入れ替えること自体にアッタールの特徴は見出すことができないであろう。むしろ、アッタールの特徴は、その恋愛詩の手法を「神への愛」いう思想を伝達する「寓話」という形式において述べたことである。すなわち、アッタールがこの寓話を通じて示されている特徴は「神への愛」と愛するものと愛されるものを入れ替えるという手法が合わせられることによって誕生しているのである。

さらに述べるならば、アッタールは印象を強めるためにもう一つの手法をこの寓話において用いている。それは、「血 (khūn)」という単語を用いた殺しである。アッタール自身は彼の韻文作品において「血」という単語を好んで使い、この作品においても250回近く使っている。そして、この寓話においても43回使われている。そして、アッタールにおいては悲しみを表すために「血」を使う場合も多いが、殺しに関わる言葉として使う場合も多い<sup>103</sup>。そして、この寓話においては、話の展開に「血」がうまく使われていて、この物語の印象を強めるのに貢献している<sup>104</sup>。

アッタールは「神への愛」、愛するものと愛されるものを入れ替え、殺しにかか

わる「血」を組み合わせることによって、より強く印象を与え現実性を持つような「神への愛」の表現に成功しているのである。さらに、この寓話に登場する「愛」は「神への愛」であり、バクリーが非難したような肉欲に基づく愛ではない。それは、下記の引用からも明らかである。

今、愛の世界には三つの道がある

se rah dā rad/ja hā ne ‘esh/q ak nūn

ひとつは火、ひとつは涙、ひとつは血である

ye kī ā tesh/ye kī ash ko/ye kī khūn<sup>105</sup>

私は今火の方向にいて、

ka nūn man bar/sa re ā tesh/a zā nam

時に血を流し、時に涙を流す

ke gah khūn rī/za mo gah ash/k rā nam<sup>106</sup>

私は私の魂を火で燃やすことを望むが

be ā tesh khā/s tam jā nam/ke sū zad

あなたの場所にいるときそれはできない

cho jā ye tos/t na ta vā nam/ke sū zad<sup>107</sup>

私の涙によって恋人の足を洗い

be ash kam pā/y jā nān mī/be shū yam

私の血によって、生命という手を洗う

be khū nam das/t az jān mī/be shū yam<sup>108</sup>

これらの引用は、娘が「血」で書いた詩の一部であり、ここで詠われているのは愛の苦しみであり、引用した最後の対句では「血」が肯定的な役割を与えられていることから、生命というものが否定的な役割を与えられていて、この愛が肉体的な愛でないことが示唆されている。また、この世の牢獄を抜け出すという前述したあらすじにもあるように、それは生命と結びつくような肉体的なものではなくて精神的な愛であると述べることができる。両者の佳人が持っていたのは、肉体的ではなくあくまで精神的な愛なのである。それゆえに、アッタールはこの寓話によって、「神への愛」をガザーリーの『吉兆』やバクリーの『愛するものたちのジャスミン』よりもより現実性の高い表現によって表しているにもかかわらず、そこに、情欲や肉体というものを入れないことを同時に行っているのである。



## 結論

「神への愛」はガザーリーやバクリーなど多くのスーフィズムの思想について論じた思想家によって語られてきた。そして、アッタールも彼らの論じてきた「神への愛」の思想内容や表現方法を共有するところは極めて多い。しかしながら、アッタールは彼の作品である『神の書』において、超越的な存在でありそれまでは自然物を用いた比喻でしか語るができなかった神や愛されるものを、神の比喻として登場する佳人に本来の佳人としての役割と愛するものの役割の二つをあてはめ、その役割を相互に同一の寓話の中で交代させることによってより現実的な印象を与えるものにするのを成し遂げている。また、「神への愛」という思想も、上記の交代に殺しに関わる「血」を組み合わせ使うことによって、より強い印象を与えるものにするのに成功している。

アッタールは『神の書』を通じて、「神への愛」を他の思想家よりも現実性を帯びるような形で語り、同時に神にも現実性を帯びるようにするのである。

## 註

- <sup>1</sup> Hellmut Ritter, *Das Meer der Seele: Mensch, Welt und Gott in den Geschichten des Farīd al-Dīn ‘Aṭṭār*, Leiden: E.J.Brill, 1955.
- <sup>2</sup> Badī‘ Forūzānfar, *Sharḥ-e Aḥvāl va Naqd-o-Tahlīle*, ‘Aṭṭār, Tehran, 1960.
- <sup>3</sup> Leonard Lewisohn and Christopher Schackle (eds.), *‘Aṭṭār and the Persian Sufi Tradition-the Art of Spiritual Flight*, London, 2006.
- <sup>4</sup> アッタール『イスラーム神秘主義聖者列伝』, 藤井守男訳, 国書刊行会, 1998.
- <sup>5</sup> アッタール『鳥の言葉』, 黒柳恒男訳, 平凡社, 2012.
- <sup>6</sup> フォルザーンファルやナフィースイー、リッターなどの多数の研究者がアッタールの人生について解明しようと試みてきた。しかし、キャドキャニーも述べるように、アッタールの人生はいまだに不明瞭なままである。[Farīd al-Dīn ‘Aṭṭār, *Manṭiq al-Ṭayr*, ed. Shafī‘ī Kadkanī, Tehran, 2015, 30.]
- <sup>7</sup> J.T.P. De Brujin, “The Preaching Poet: Three Homiletic Poem by Farīd al-Dīn ‘Aṭṭār,” *Edeviyât* 9, 1998, 85-100.
- <sup>8</sup> この 6 作品以外にも、ほとんどの研究者が真作としている作品もあるが、ここでは、全ての研究者が真作として認めている作品として 6 作品とした。
- <sup>9</sup> ジェラルド・ジュネット『物語のディスクール』花輪光、和泉涼一訳、書肆風の薔薇、1985, 272-273。
- <sup>10</sup> 例えば、リッターはアッタールに関する古典的な研究において愛について 200 ページ以上をさいているし、シンメルはアッタールの詩のメインテーマとして愛に伴う苦痛について論じている。[Ritter, *op. cit.*, 347-574: Annemarie Schimmel, “The Pilgrimage of the Birds Sanā’ī and ‘Aṭṭār,” *Mystical Dimensions of Islam*, 305-306.]

<sup>11</sup> この論考においては美男と美女を総称するのに佳人という言葉を用いる。アッターールの作品においては、佳人（美男と美女）は *māh-vash*（月のような）などによって一単語で表されることもあるが、一単語ではなくさまざまな表現が組み合わされることによって佳人というものが表されることの方が圧倒的に多い。それゆえに、アラビア語やペルシア語の一単語で佳人の意味を指すことは困難であると考え、佳人に対するアラビア語やペルシア語表記をこの論考では用いないことにする。

<sup>12</sup> Carl W. Ernst, “The Stages of Love in Early Persian Sufism, from Rābi‘a to Rūzbihān,” *The Heritage of Sufism Volume 1: Classical Persian Sufism from its Origins to Rumi (700-1300)*, ed. Leonard Lewisohn, 1999, 435.

<sup>13</sup> アッターール, *op.cit.*, 304-305.

<sup>14</sup> Ernst, *op.cit.*, 446-447.

<sup>15</sup> Aḥmad Ghazālī, *Sawānih*, Istanbūl, 1942, 2.

<sup>16</sup> *Ibid.*, 3.

<sup>17</sup> *Ibid.*, 4.

<sup>18</sup> *Ibid.*, 6.

<sup>19</sup> *Ibid.*, 8.

<sup>20</sup> *Ibid.*, 8-9.

<sup>21</sup> *Ibid.*, 10-11.

<sup>22</sup> *Ibid.*, 12-13.

<sup>23</sup> *Ibid.*, 16-17.

<sup>24</sup> *Ibid.*, 17-18.

<sup>25</sup> *Ibid.*, 18-28.

<sup>26</sup> *Ibid.*, 29.

<sup>27</sup> *Ibid.*, 32.

<sup>28</sup> *Ibid.*, 34.

<sup>29</sup> 「消滅、消融、神秘的合一体験を表すスーフイズムの用語」〔東長靖「ファナー」『岩波イスラーム辞典』大塚和夫、小杉泰、小松久夫、東長靖、羽田正、山内昌之編、2009、829。〕

<sup>30</sup> *Ibid.*, 35-36.

<sup>31</sup> *Ibid.*, 40.

<sup>32</sup> *Ibid.*, 41-42.

<sup>33</sup> *Ibid.*, 43.

<sup>34</sup> *Ibid.*, 47.

<sup>35</sup> *Ibid.*, 48.

<sup>36</sup> *Ibid.*, 59.

<sup>37</sup> *Ibid.*, 60-61.

<sup>38</sup> *Ibid.*, 69.

<sup>39</sup> *Ibid.*, 76-77.

<sup>40</sup> *Ibid.*, 79.

<sup>41</sup> *Ibid.*, 80.

<sup>42</sup> *Ibid.*, 81.

<sup>43</sup> *Ibid.*, 92.

- 
- <sup>44</sup> *Ibid.*, 95.
- <sup>45</sup> *Ibid.*, 97.
- <sup>46</sup> *Ibid.*, 104.
- <sup>47</sup> 例えば、[‘Attār, *Manṭiq al-Ṭayr (Maqāmāt-e Ṭoyūr)*, edited by S.Ş Gouharīn, Tehran, 2011, 50] や [*Ibid.*, 64] において用いられる。
- <sup>48</sup> 例えば、ライラとマジヌーンは [Ghazālī, *op. cit.*, 45-46] の寓話に登場しマフムードとアヤーズは [*Ibid.*, 62-66.] の寓話に登場する。
- <sup>49</sup> 『神の書』においては、例えば、ライラとマジヌーンは [Farīd al-Dīn ‘Attār, *Ilāhī nāma*, edited by Shafī‘ī Kadkanī, Tehran, 2013, 194] の寓話に登場し、マフムードとアヤーズは [*Ibid.*, 2013, 213-214] の寓話に登場する。
- <sup>50</sup> Ernst, *op. cit.*, 448.
- <sup>51</sup> *Ibid.*
- <sup>52</sup> 井上貴恵『愛する者たちのジャスミンの書』におけるルーズビハーン・バクリー・シーラーズィーの愛（‘ishq）論，オリエント第 60 巻第 1 号，日本オリエント学会，2017。
- <sup>53</sup> *Ibid.*, 450. [エルンストによれば、バクリー自身の階梯について述べた箇所が 19 章から 32 章となっているが、本論文に使っているバクリーの『愛するものたちのジャスミン』においては 20 章から始まっているので、本論文では異なる「愛」が使われている箇所のはじめを 20 章と記述した。]
- <sup>54</sup> Rūzbihān Baqlī, *‘Abhar al-‘āshiqīn*, Tehran, 1958, 4.
- <sup>55</sup> *Ibid.*, 5-6.
- <sup>56</sup> *Ibid.*, 8.
- <sup>57</sup> *Ibid.*, 11.
- <sup>58</sup> *Ibid.*, 17.
- <sup>59</sup> *Ibid.*, 18-19.
- <sup>60</sup> *Ibid.*, 20-21.
- <sup>61</sup> スィーモルグは例えば [Baqlī, *op. cit.*, 20] で登場し、ライラとマジヌーンは [*Ibid.*, 21] などで登場する。
- <sup>62</sup> 例えば、[*Ibid.*, 24-25.]
- <sup>63</sup> 例えば、ヨセフへの愛から神への愛がやってくるという記述 [*Ibid.*, 28] や、人の美しさから愛はやってくるというような記述 [*Ibid.*, 28-29] がある。
- <sup>64</sup> 例えば、[*Ibid.*, 52-54.]
- <sup>65</sup> *Ibid.*, 72-73.
- <sup>66</sup> *Ibid.*, 94-96.
- <sup>67</sup> *Ibid.*, 81.
- <sup>68</sup> *Ibid.*, 70.
- <sup>69</sup> *Ibid.*, 65.
- <sup>70</sup> *Ibid.*, 79, 82-85.
- <sup>71</sup> *Ibid.*, 101-103.
- <sup>72</sup> *Ibid.*, 104.
- <sup>73</sup> *Ibid.*, 109.

- 74 *Ibid.*, 110.
- 75 *Ibid.*, 111.
- 76 *Ibid.*, 106.
- 77 *Ibid.*, 111-113.
- 78 *Ibid.*, 113.
- 79 *Ibid.*, 114.
- 80 *Ibid.*, 128-129.
- 81 *Ibid.*, 131.
- 82 *Ibid.*, 138-140.
- 83 『鳥の言葉』においては、スィーモルグは物語を通して目指される神の比喻でありその名は至る所に登場する。サヨナキドリは鳥たちの導き手であるヤツガシラと鳥たちの対話が行われる時の最初の対話相手として登場する。[‘Attār, *op. cit.*, 2011, 42-45. (第 749 対句～第 801 対句)]
- 84 Forūzānfar, *op. cit.*, 97.
- 85 『鳥の言葉』では対話の内容と寓話のテーマがほとんど一致している。
- 86 ‘Attār, *op. cit.*, 2013, 114. (第 76 対句) [韻律はハジャズ]
- 87 *Ibid.* (第 77 対句)
- 88 *Ibid.* (第 78 対句)
- 89 *Ibid.* (第 83 対句)
- 90 *Ibid.* (第 84 対句)
- 91 *Ibid.* (第 85 対句)
- 92 *Ibid.*, 171. (第 1389 対句)
- 93 *Ibid.* (第 1390 対句)
- 94 *Ibid.* (第 1397 対句)
- 95 *Ibid.* (第 1404 対句)
- 96 *Ibid.*, 173. (第 1438 対句)
- 97 Baqlī, *op. cit.*, 111-113.
- 98 「指揮官、指導者、首長、命令、物事を意味するアムルの派生語で、命令権者をさす。一般的に、あらゆる集団の指導者をさして用いられるが、古典期には、軍事的な司令官、ウマイヤ朝やアッパース朝における地方総督などの称号として使われた。」[中田考「アミール」『岩波イスラーム辞典』大塚和夫、小杉泰、小松久夫、東長靖、羽田正、山内昌之編、2009、65。]
- 99 ‘Attār, *op. cit.*, 2013, 371-387. (第 5723 対句～第 6133 対句)
- 100 佳人（娘）の描写が第 5742-5761 対句、佳人（奴隸）の描写が第 5780-5828 対句、愛するもの（娘）の描写が第 5830-5896 対句、愛するもの（奴隸）の描写が第 5899-5921 対句、愛するもの（娘）の描写の 2 回目が第 5941-5944 対句、愛するもの（娘）の描写の 3 回目が第 5997-6038 対句、愛するもの（奴隸）の描写の 2 回目が第 6041-6045 対句、愛するもの（娘）の描写の 4 回目が 6084-6126 対句にある。
- 101 アッタールの『鳥の言葉』に挿入される最も長い寓話。シェイフ・サンアーンがキリ

---

スト教徒の娘に恋をして、信仰を捨て、再び信仰を取り戻す段階を描いた物語。

<sup>102</sup> ヴィクトル・シクロフスキー「物語と小説の構造」『文学の理論—ロシア・フォルマリズム論集』野村英夫訳, 1971, 164。

<sup>103</sup> 例えば、アッタルの主著『鳥の言葉』において、165 回中 34 回「血」が殺人に関係する言葉として使われ、『神の書』においては、244 回中 79 回殺人に関係するものとして使われる。

<sup>104</sup> 特に、娘が血を流して死ぬまでの場面は、「血」という言葉が流れる血と悲しみの意味の両方を表すように意味が重層的に使われて話がうまく展開している。

<sup>105</sup> ‘Attār, *op.cit.*, 2013, 386. (第 6109 対句)

<sup>106</sup> *Ibid.* (第 6110 対句)

<sup>107</sup> *Ibid.* (第 6111 対句)

<sup>108</sup> *Ibid.* (第 6112 対句)